

法では困難であることが明らかとなったため、介入期間、介入法については今後更なる検討が必要と考えられた。

#### P1-17.

### フィリピンの人々の健康と保健医療職— Health of People in Philippine and Health Workers —

(東京医科大学病院)

○岡崎 夏海、○渡辺 実理、福田 千絵  
藤井 研

【はじめに】 看護学科4年次の科目「国際看護学フィールドワーク」にて、2016年9月に5日間フィリピンのタナウン市の病院で、海外演習を行った。現地では、患者や職員、現地の看護大学生と交流して話を聴く機会等を通し、実際に行われている医療・看護、人々の健康や保健医療システムについて学んだ。

【フィリピンの保健医療の特徴】 医療保険制度はあるが、富裕層と貧困層の経済格差があり、国民全員が加入できていない。健康問題として、食生活が影響する生活習慣病や、デング熱、狂犬病、結核などの感染症が多い。

【演習内容】 初日は現地の看護大学でフィリピンの医療システムについての講義や、実習施設のオリエンテーション、学生間の交流を行った。2～5日目はグループに分かれ、第1次医療施設から第3次医療施設までの計4か所の施設をローテーションし、施設内の見学や、実際にバイタルサイン測定等のケアを行った。また、医療者や患者と交流する機会を通し、保健医療職の役割を学んだ。

【結果および考察】 フィリピンでは糖尿病や結核・感染症等の疾患が多くみられ、糖分や油分の摂取量と高カロリーの外食の多さ、住民の健康に関する知識不足等、社会文化的側面が健康に影響していた。病院では家族が患者の環境整備等を行い、看護師は専門的な医療ケアやマネジメント業務を担っていたが、誰もが病院を受診できるわけではない。そのため保健医療職は健康問題とその背景を理解し、それらに合わせた一次予防を重視し積極的に取り組んでいた。そこから看護ケアには人々の生活や思想、文化、経済、環境等、広い視点からのアセスメントが必要であり、その国独自の視点を身につけることが

重要であることを学んだ。保健医療職は限られた時間の中で、必要な知識を提供し、健康意識の改善を図ることが重要であると理解した。

#### P1-18.

### 海外勤務者における新たな健康管理対策の構築

(社会人大学院博士課程3年渡航者医療学)

○栗田 直  
(渡航者医療センター)  
濱田 篤郎

【目的】 我々がこれまでに行ってきた海外派遣企業への調査によれば、海外勤務者の健康管理対策は中小企業で大変遅れており、大企業においても複雑な健康対応に難渋している状況が明らかとなった。そこで、我々は外部資源を活用する方法として、労働者健康安全機構の産業保健総合支援センター（産保センター）とトラベルクリニックが連携し、海外勤務者に健康管理を提供するシステムを提案している。今回は、両施設が本システムに参入可能か判断するための調査を行った。

【方法】 日本渡航医学会のホームページに掲載されているトラベルクリニック90施設を対象に、海外勤務者への診療実態について郵送によるアンケート調査を行った。また、47都道府県の産保センターを対象に、海外勤務者への健康対応の実態についてインターネットによるアンケート調査を行った。

【結果】 トラベルクリニック調査では、56施設から回答が寄せられたが、各施設の受診者のうち海外勤務者の占める割合は、病院に設置された施設よりも診療所規模の施設の方が多かった。海外勤務者に対する診療内容として、予防接種は9割以上、健康診断は7割以上のトラベルクリニックで対応可能だったが、派遣前の健康指導や派遣中の健康相談は、診療所の方が病院に比べて対応可能な施設が多かった。産保センター調査では47施設から回答が得られたが、海外勤務者の健康問題に関する相談や研修会を実施している施設は大変少なかった。これは海外派遣企業の多い自治体に設置された産保センターでも同様だった。

【考察】 本調査から、海外勤務者への新たな健康管理対策を構築するためには、診療所規模のトラベルクリニックの活用が有効と考えられた。産保セン

ターでは海外派遣企業の多い自治体施設を中心に、企業への支援体制を整備することが必要と考えられた。

【謝辞】 本研究は独立行政法人労働者健康安全機構の平成 27 年度産業保健調査研究費の助成を受けて実施した。

#### P1-19.

### 「e 自主自学」上で簡単にできるシナリオ型教材の開発

(医学教育学)

○油川ひとみ、ブルーヘルマンスラウル、

泉 美貴

(救命救急センター)

三島 史朗

【背景】 系統講義と多肢選択法の試験は、知識の習熟度を高めることはできても、問題解決型の思考力育成に課題を残す。シナリオ型教材は、机上シミュレーションが可能で、問題解決型の思考を鍛えるのに適すると考え、e ラーニングを用いた自習教材の開発に至った。

【目的】 e ラーニングにおける教材の特長には動画および高画質の画像を使用できる点の他に、ページからページにリンクをはって行き来できる点がある。この点に着目し、設問の選択肢のボタンを押して次の設問に進む形式の教材を開発した。座学で病態から疾患を学んで来た学生に、実臨床の前に、症候から疾患を鑑別し治療方法を考える教材を開発し学生の自習教材とする。学習履歴のデータを分析し教育内容の向上のために利用し、最終的には簡単に制作できるよう標準化する。

【方法】 英国ノッティンガム大学で開発された教材制作のオープンソースシステム Xerte を使用し、「意識障害」「呼吸不全」「循環不全」のテーマで 6 教材を制作した。各教材とも患者が搬送されたところから始まり、選択肢を追って救命に至るところまでのシナリオ型の問題展開を行う。選択肢は正答を選択することのみを目的とせず、正答を選択する過程の選択肢を重視する。さらに、副教材としての資料へのリンクを提供したり多肢選択問題で知識を深めたりする工夫も行う。学生への使用の前にピア評価で質保証を行う。SCORM 対応で制作したため学習履

歴を取得でき、Learning Analytics (LA: 学習分析)により、学生の理解が不十分な点を抽出し授業・実習における教育の改善に結び付ける。教材開発の全工程において、難しい技術は用いず、簡単に制作できるよう工夫している。

【結語】 シナリオ型教材を制作し、ピア評価を経て学生への使用に至る。今後学習履歴を分析し効率よく授業および実習に反映させる。また、教員が自分で制作できるよう制作過程を標準化し、この取り組みを広げて行きたい。

#### P1-20.

### 「働き方改革」アンケート調査から見た本学の課題と改革提案

(医師・学生・研究者支援センター)

○須藤カツ子、大久保ゆかり、天野 栄子

荻野 令子、花田 尊子、宮川 香織

荒谷 聡子、長井 美穂、矢野由希子

真村 瑞子

(細胞生理学)

持田 澄子

(人体病理学)

原 由紀子

(神経内科)

赫 寛雄

(公衆衛生学)

小田切優子

(腎臓内科)

長岡 由女

(血液内科)

古屋奈穂子

(救命救急センター)

河井健太郎

(放射線科)

吉村 真奈

(メンタルヘルス科)

村越 晶子

医師・学生・研究者支援センターでは大学病院ワークライフバランス推進部会と共催して、平成 28 年 12 月に「働き方改革」アンケート調査を実施した。アンケートの回答集計から、本学の働く環境について見えてきた課題と今後の効果的な取り組みについ